

一月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

ヒト、かまきり、せみ 杜 沢 光一郎 埴 玉

左眼は全く見えねど左眼の方の眼鏡も叮嚀に拭く
カマキリはまぶた持たねど三角の頭の左右に大き眼光らす
複眼といふ眼をもてるカマキリは人間われをいかに見てゐる
複眼にさらに単眼三つ持つ蟬の視界といふもの思ふ
待つ人の来ざれば折りてはまた開くポキポキと折れる折りたたみ傘

介護 大 松 達 知*東 京

いましばし烈しさ欲しくまひるまの餃子を辣油まみれにしたり
いい子だぞ、言いつつ寝顔なでておりいい子だしよってなりがちである

ぼたりぼたりとケニアの夜が溜まりゆき白いカップに朝が来ている
死ぬまでずっと生きてたのつてその父を伊藤比呂美が言うのがわかる
父のとなりで時代劇チャンネルずっと見るだけの介護もありじゃないと言う

蝶の旅人 田 宮 朋 子 新 潟

名はつとに聞けどもいまだ見ざる蝶あさぎまだらがわが庭にゐる
窓ごしにわれら見てをり恍惚と花の蜜吸ふあさぎまだらを
秋一夜あさぎまだらに宿貸しぬ藤袴の花の寝心地いかに
あさぎまだら撮らむとすればおほぶりの翅をひろげてたふたふと舞ふ
キッチンにわれに書斎の主よりあさぎまだらの写メールとどく

コロナ封じ 清 水 正 子 神奈川

宇宙パワーやどる宝珠のかたちして美味なり秋の桃(西王母)
癌家系なれども食めば延命のかなふ桃かも(西王母)これ
桃のたね捨てておもひぬ百三十八億年まへの(宇宙の種)を
(宇宙の種)何がなんだか分からない垂直神話のやうなビッグバン
伊邪那岐が黄泉比良坂で投げし桃コロナ封じにその呪力欲し

☆ ☆ ☆



水島晴子 兵庫

鋪石の落葉を捲きて風立つにまたおもはるる今は亡き君
真つ直ぐに眸を向けて飾るなき言葉継ぎにき辻本陽子さん
紫苑咲く深むらさきを地の上のかたみとはして旅立ちしひと
隣人が涙ぐましとわれを言ふ杖つきて聖天の坂ゆく我を
「やあいらっしやい」診察室にひびきたり男盛りといはむ眼科医の声

武田弘之 神奈川

これの世を八十八年余り生き見えきたるもの何にもあらず
コロナ禍の今を楽しみずらし旅断捨離をする人多しとぞ
先達の教へ守りて呆けぬやう短歌を作りつづけておます
わが庭に梅・松ありて前山の竹群と和す来鳴け鶯
実を結ぶための慣と梅の木は葉を一つづつ落とすははじめつ

高野公彦 千葉

手より手へ柿放られて柔らかき弧は繋ぎたり老いと若きを
服装に無頓着なる高野氏の老いてしだいに遊牧民のごとし
こめかみにある(太陽)といふツボを押し選歌を続ける一日
連なりて韻き合ふなり言葉とは地上に降りた銀河の一部
寒暁の眠りの中に入り来たりひそやかにしてきらめく雨声

仲宗角 三重

欠落の「時」埋むるがに庭の木々いつでもどれかが声を立てゐる
山にゆきあそぶと言ふなることなどもあこがれなれと八十九歳では
生きることたやすからねど生きゆくが一つの道につづいて暮れゆく
かにかくに一日の済みて夜となれば木菟がささやく声のさびしさ
雨あがり夕べに映ゆる岬山のかなたの波にあかるきひとかけら

奥村晃 作* 東京

ジャコメッティ不思議や不思議 図書館の美術全集にその図版無く
ジャコメッティの女人立像の図版求め図書館巡りす彼マイナーか
瘦せぎすのジャコメッティの女人像現実に居るかかる女性は
太るのを恐れて厭う我等だがジャコメッティの女人像見たか
鳥毛立つ奈良の女もルノール描く女もふくよかなりき

森重 香代子 山口

庭隅の物置小屋を壊したり秋日を浴びし地面の白さ
菊月の庭にひらめく蝶のゐて捨て置く植木鉢かがやけり
思案する者のごと棟を動かざる鴉に晩夏の陽があたりをり
《文学者の墓》をめぐりて宮修二夫妻のみ前に額づきたりき
その中のひとりを知れば献体者の慰霊の記事をつつしみて読む

日影康子 富山

ならば立ち黄に彩づける籐草畑にさわさわと夕かぜを浴ぶ
台付きの非接触体温計を本堂に立てて秋彼岸の法要けふは
野路いちめん黄ばみてさやく狗尾草に潜むがに混る紅き犬蓼
「お月さま昇りましたよ」と子の妻に呼ばれて嬉し今宵十五夜
雲間分け天心をゆく十五夜の月の孤愁を夜更けて見上ぐ



古屋 祥子 群馬

痛み止め飲んで秋夜の刻を耐ふ、魔法の杖はまだ届かぬか
少しでも早く進めよ夜明け待ち握る時計に念力込める
半歳の床伏しの身を起こし得て見るは秋萩の点々の赤
百日紅長く咲き継げこの花に逢ふための一年また一年ぞ
テレビよりラジオより読書たのしむに右眼左眼と視力失せゆく

影山 一男 千葉

新妻と行きし新宿(柿伝)の味思ひ出づ熟れ実を見上げ
採る人のなく柿熟れて定位置を枝に占めつつ秋深まれり
家ごもり続くひと日に手紙ありわれと同じく寂しさ嘆く
低年金退職金なき自営業おのれ信じて日を重ねゆく
いますこし氣力を保てちちははの悲しみ知らず生き来しからに

桑原 正紀 東京

午前四時灯りつけたるキッチンに水甕、竈、火吹き竹なし
十六年ゐたる生家の厨辺の煙のほひしないマンション
電子レンジ、冷蔵庫、ガスコンロすら母の一生(じよふ)に縁のなきもの
せめてもといまだに電気釜と呼ぶいとしき温み持つ電気釜
注し口の細きあかがねのケトルあり珈琲淹るるのみの用もて

狩野 一男 東京

実りとか充実とかを国びとにおもはせるべく十月は来ぬ
コロナ下といへど十月すがすがし菅内閣と関係あらず
なんといふ幸ひならむがきの頃キム・ノヴァクとふ名を知り得しは
妖艶な美貌で人気を集めしと言はれてきたがそこまでは知らず
キム・ノヴァクの場合はどうか大統領トランプなのかバイデンなのか

宮里 信輝 神奈川

五十七で逝きし白秋七十四で逝きたる柁二しのぶ七十
ビニール傘ひらきあゆめばよみがへる海月でありしころの記憶が
歌集読み短歌も詠みたしと言へり山ガールにて空美の鉄子
唇はいまにわすれず二十五ではじめてかさねたるくちびるを
庭先に生りし零余子の銀の粒炒りて塩振り 熱燗を酌む

岡崎 康行 新潟

自家製のみどりの茗荷酢漬けせり台所の地下で育てくれなぬ
落人の伝説の里はこの向きか古渡路(ふるとうろ)といふ道を走れる
時計ひとつ増えて飾りぬわが部屋を世の(正常)で固めゆくこと
いつの日かわれが使へる老眼鏡この世に置きて叔母は逝きたり
接ぎ木されれ胡瓜を多く産しつづ終へてゆきたり南瓜の夏は

小島 ゆかり 東京

あかるすぎる秋のまひるま百円の老眼鏡をあちこちに置く
一群のとんぼ飛ぶとき鳴り出でて釣鐘となる秋のおほざら
対岸に曼珠沙華さく川の道 逃れやうなき齢とおもふ
母ねむる部屋のからやみ虫か何か夜のガラスに激突したり
雨ののち魑魅(すたま)のごとき月のほり武蔵野樹林、晩秋に入る

木 畑 紀 子 京 都

記念館大会選者おほけなし師にまみえたることなきわれに
応募歌の届くの間あり「宮柎」二集 読みて考ふ短歌について
病みつげる柎二六十代のこゑ「素直懸命」指針に選歌す
十五歳のわが幼な歌選りくれし師をおもひジュニア部門読みつぐ
苦しみをはき出す哀しみをこぼす一万首読み二〇二〇年秋

島 田 暉 神奈川

断崖を叩ける波の心なれ祭り太鼓を教へる老いは
コロナ禍に自粛してゐる雨の夜祭りを止めし太鼓の幻聴
荒波に叩かれ続ける断崖の心になりて死なず生きなむ
愛されて火の燃え上る齡過ぎ骨きしませて病院へ行く
言葉には音あり血潮のあることを夫婦が交はず会話におぼゆ

津 金 規 雄 神奈川

つくつく法師消えて木犀匂ひ初むいのちのバトン渡りゆく季
秋霖に空濡れそぼちげちめなく昼は夜へと移ろひてゆく
三幕の劇のごとしも醒めては見るオータムナイトの夢なまなまし
「あんな美女がモテないわけない！」ドラマ視る妻の口癖 吾も然思ふ
秋天のかーんと抜けて紺深しチャイコフスキーの謎めける死よ



小 山 富 紀 子 京 都

外出の前にあれこれマスク選るこの(新しい生活様式)
朝なさな鏡の前でマスク選る今日はこの色この勝負色
花柄のマスクをかけて外に出れば秋の陽ざしがいいねと寄り来
われを待つ君のマスクは空の色あの日二人で見しそのいろ
マスクかけ会釈して皆離れゆく華やき失せし劇場ロビー

小 嶋 一 郎 佐 賀

長生きをせよとて姪が送り来し十年日記の一年が過ぐ
わが姓は「小鳩」とありて苦笑せり同窓会の参加名簿に
散歩途次憩ふ石には済まないがあと三十センチ高さが欲しい
乙女子は追ひ越してのち十歩ほど先よりうしろ振り向くはなぜ
卓上にくすりぶくろを置きてのち夕食を摂る小心のゆゑ

後 藤 美 子 北 海 道

したたかに人は生きゆくリネン、シルク、レース飾りのマスク選びて
〈ウイズコロナ、アフターコロナ、ニューノーマル〉コロナ禍由来の片仮名器流行り
サルトル、カミュとも交流ありしとぞジュリエット・グレコ死す九十三歳
薬液にまみれ死にゆくカメムシを目守る酷薄わが裡に棲む
朝ごとに白くくもれる窓ガラス秋冷深み手稲嶺初冠雪

福 士 り か 青 森

くれなゐの峰走りして岩木嶺は秋訪れのしるべとなれり
春、夏、秋なべて祭りの止められて新型ウイルス翻る街
始まりは高級クラブ小都市の名士をあまた渡るウイルス
「陽性」とは明るいひびき太陽を恐れるごとく家籠る昼
流行語大賞候補にあげるのはあまりに辛し「密」「クラスター」



橘 芳 園 新 潟

村寺の住職なりしわがつとめ卜占祭祀の域出でざりき
善男善女の無知よきことに神秘主義出ることのなし日本仏教は
歎異抄読みたけれどもひまなしと言へり死ぬまでひまもてぬ人
病院に友を見舞ひて帰る夜木々囲む寺は廢墟の如し
みちばたにころがる石の一つさへなごりを惜しみ見るときがくる

水 上 比呂美 東 京

冬に入るべく舗道を渡りゆくモンクロシヤチホコ終齡幼虫
宮英子齋藤史を読み継ぎて老いのモデルをわが探す日々
前世紀名告るありのみ剝きたれば令和二年の水したたらす
人名の多き歌集を読みさしてぬるめのお湯に身を浸す夜半

ひだる神なだめんとして苦味さびえぐ味雑ざぶゆたかなる黒糖一顆

風 間 博 夫 千 葉

コロナ禍のインフルエンザ発症を避けんとワクチン二の腕に打つ
七十年生ききて初体験となるインフルエンザワクチン打つは
ワクチン接種治療にあらず保険効かず医療費控除の対象とならず
松戸市に住んで六十五歳以上初回ワクチン接種千円
二回目のワクチン接種に補助あらず自前で四千円ほど払ふ

田 中 愛 子 埼 玉

山中をしづかに下りきて水は滝となる時ああと言ひしか
われを待つ人を思へりゆつくりとアールグレイの茶葉のひらく間
コロナの推理と共に楽しみ額田やえ子の訳す台詞を
今ならば差別用語となることは『植物祭』に黙読しをり
一画を加へ(鳥)を(鳥)にして真夜のノートに朝を呼ぶなり

鈴 木 竹 志 愛 知

デイオニソス的に咲きぬる緋ダリアが祝ひの席のわれに抱かるる
届かないところへわれを連れてゆくマルク・シヤガールのみどりの牡牛
果てしなき真冬の海は一冊のお厚き書物船を沈めて
指先のきれいな人は薄情と言はれてしまふ雨の駐車場
穂すすきが多摩川河原に光りをり賽の河原はもう少し上流かみ

原 賀 環 子 東 京

ダンボールに草原ひとつしまはれて青の時代を阿蘇に佇つわれ
チンザノをはじめて飲んだあのバーは六本木のどこ 想ひ出せない
振花のモジズリよりも細腰にミヤマモジズリ咲ける細道
夏の陽に目のよわりしか止まりてはパラパラうごく十月の蟻
朝は昼の、昼は日ぐれの形見かな依らむものなく夜がはじまる

水上 美季 東京

日射し受け口笛吹いてゐるやうだめだかと一緒にゐるエアポンプ
めだかには怒りがあつて餌のない皿を蹴ちらすかはゆい尾鰭
神さまを数へる単位が(柱)だと知つてから神は遠くなりたり
千鳥ヶ淵戦没者墓苑納骨数三十七万六十九柱といふ

一はしら二はしら三…と数へゆく仕事もあつて 合同庁舎内

大野 英子 福岡

GOTOが何なんけつきよく金がある人たちだけに恩恵がある
湧きに湧き怒りをいかにしづめんかたまには虎のやうに吠えたし
ふたたびをGOTO職業安定所となりさう秋はひかりにあふれ
これの世のあやふかりしも春馬逝き結子逝きたり不可視の闇へ
百日紅すつかり刈られ残りゐるひと花ころもとなげに揺る

松尾 祥子 東京

金木犀かをれる朝水^{あした}さへも飲まずに犬は胃液を吐けり
尾も振れぬハッピー九歳膿たまり破裂寸前の子宮かかへる
子宮全摘全身麻酔する犬に祈れり天の気地の氣をあはせ
犬よりもわれらの方が喜びぬ生きてわが家に帰り来し犬を
騙すのもときには良けれカステラに薬を埋めて犬に食べさす



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九-八-一〇六

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三六一-三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-一四-一六

水上比呂美歌集 令和2年9月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青曼珠沙華 コスモス叢書第1177篇 柘書房

著者住所 〒182-0034 東京都調布市下石原二-二四-四三